

氏 名	むら た よう へい 村 田 陽 平
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 311 号
学位授与の日付	平 成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 行 動 文 化 学 専 攻
学位論文題目	ジェンダー地理学の再構築 ——空間と男性研究の可能性——

論文調査委員 (主 査) 教 授 金田章裕 教 授 石川義孝 教 授 杉浦和子 助教授 米家泰作

論 文 内 容 の 要 旨

本稿は、従来のジェンダー地理学では十分に明らかにされてこなかった、空間と「男性」という存在との関係性を解明することで、「女性」の視点が中心であったジェンダー地理学の再構築を目指すものである。

第Ⅰ章と第Ⅱ章では、ジェンダー地理学において、なぜ空間と男性に関する研究が必要であるのかを指摘した。

第Ⅰ章では、日本の地理学におけるジェンダー研究の進展を批判的に検討することで、空間と男性研究の必要性を導出した。まず、日本の地理学に存在する性差の偏りを、学会の会員数や学術論文、職位などの数量的側面から指摘した。次に、日本の地理学におけるジェンダー研究の歴史を概観した。そのうえで、日本の地理学では、ジェンダー概念が近年注目される一方、必ずしもその意味が的確に認識されていないことを示した。具体的には、ジェンダーの視点が女性の視点として誤解されている点、その視点と不可避な関係にあるセクシュアリティの側面が理解されていない点を明らかにした。そして、これらの問題を解消するためには、ジェンダーを女性の問題のみならず、男性の問題としても考えていくことが重要であると指摘した。

第Ⅱ章では、(第Ⅰ章で説明したような)ジェンダー概念の認識の誤りが、現実の空間の構築においていかなる問題を引き起こしているのかという次元に注目して、空間と男性に関する研究の必要性を示唆した。具体的には、男性によってジェンダーの視点を導入して設計されたといわれる岐阜県営住宅「ハイタウン北方・南ブロック」を事例に検討した。総合プロデューサーの男性建築家、南ブロックの居住者、男性建築家に選定された7名の女性設計者、施工主の岐阜県、という4つのアクターから、この居住空間の実態を分析した結果、この空間は、ジェンダーの視点を踏まえたものというより、むしろその視点が問題にしてきた男性中心的な発想で生産されたものであることが判明した。このことは、空間論においてジェンダー概念に伴うポジショナリティの意味が、男性という主体に十分に把握されていない表れであり、その弊害が現実の空間においても表出していることを裏付ける。そして、このような問題を打開するという観点からも、空間と男性研究が必要であることが示唆されたといえる。

第Ⅲ章から第Ⅵ章では、従来のジェンダー地理学ではほとんど検討されてこなかった、現実の空間における男性という存在の意味をさまざまな角度から検討した。

第Ⅲ章では、その第一歩として、あらためて従来のジェンダー地理学の潮流を確認したうえで、現代の中年シングル男性が疎外される場所を検証することで、男性にとっての空間や場所の意味を解明した。具体的には、35歳から64歳の10人の中年シングル男性への深層インタビューを通じて、彼らにとっての「地方」「住まい」「職場」「都市」という4つの場所の意味を明らかにした。そのうえで、このような場所や空間の問題が、必ずしも中年シングル男性のみならず、男性全体に通じるものであることを指摘し、ジェンダー地理学において、男性という存在を検討することの重要性を明示した。

第Ⅳ章と第Ⅴ章では、ジェンダーの視点と不可避な関係にありながら、従来の日本の地理学においてはほとんど検討されてこなかった「セクシュアリティ」の視点を新たに導入して、空間と男性に関する分析を進めた。

第Ⅳ章では、日本において1999年に男性政治家による性差別発言として問題になった「西村発言」に関する資料記事の分析を通じて、男性異性愛をめぐる空間のポリティクスを解明した。まず、西村発言の前提としているセクシュアリティの空間構成の意味を指摘し、セクシュアリティが私的な領域のものと認識されていることを明らかにした。次に、そのような空間構成が、いかに構築されているのかを批判的な視点から検討したところ、セクシュアリティが実際的には公的な場所で一定の役割を果たしていることが明らかになった。最後に、西村発言を問題にした異性愛男性たちの動向から、セクシュアリティをめぐる空間構成が、必ずしもすべての異性愛男性にとって自明視されているわけではなく、主体的な問題になりうることを導出した。このような異性愛男性という主体に注目したことによる知見は、同性愛男性という主体に収斂しがちであった男性のセクシュアリティに関する地理学研究にとっても有意義な視点となるであろう。

第Ⅴ章では、「男性」という性別カテゴリー自体が日常空間においていかなる意味をもつのかということを、日本のセクシュアルマイノリティの言説資料をもとに検討した。ここでは新たに、「外見の性」という性別に関わる概念を仮説として検証を行った。まず、「外見の性」が現代の公共空間といかに関連しているのかを考察した。次に、男性の「外見の性」に意味付けられる女性への抑圧性を検討し、その意味付けを行っている主体は、女性のみならず男性でもあることを示した。そして、公共空間における男性という性別は、「外見の性」が男性である状態を意味することを明らかにした。この知見は、近年日本で生産されつつある「女性専用空間」の意味を考えるうえでも有意なものとなる。

第Ⅵ章では、さらに男性の「身体」という次元に注目し、空間と男性身体との関連性を検討した。身体は、空間を構成する根本的な要素のひとつであり、空間とジェンダーに関する空間構造を解明するうえで、その構造の一端を担う男性身体に注目することは不可欠である。ここでは具体的に、現代のたばこ広告にみられる男性の身体と空間の表象を検討した。たばこ広告に注目する理由は、日本において喫煙は男性に典型的なジェンダー化された行為の一つであり、たばこ広告が男性身体と空間の関係を多く表象しているからである。このようなたばこ広告を分析した結果、男性身体に関わる典型的な特徴として、「自然への挑戦」「非言語的な『語り』」「女性の視線の同伴」「煙の吐露」「同性身体との距離の保持」という5点が導出された。これらの特徴は、男性身体がいかに空間と関わっているのかを具体的に示すとともに、日常的な空間が男性の一定の身体所作によって構築されていることを示唆するという点で注目に値する。

最終章となる第Ⅶ章では、今後、「男性」という性別カテゴリーをいかに認識してくべきかという方向性を、ジェンダー地理学の理論的側面に注目して展望した。今日のジェンダー地理学では、性別カテゴリーを社会的な構築物として捉える「クィア理論」が主流になっているが、この理論は、近代の人文社会科学が避けるべき形而上学的な側面を内包するという問題があることを説明した。そのうえで、今後ジェンダー地理学において、どのように「男性」というカテゴリーを捉えていけばよいのかを、現象学的な視点を参考にしつつ示唆した。

論文審査の結果の要旨

地理学の比較的新しい研究テーマの一つに「ジェンダー地理学」と通称される一群がある。「空間」や「場所」といった主要な研究対象が、かつての研究ではジェンダーの視点を考慮しないか、無視して成立していたのに対して、それを主として「女性」の視点から分析することによって、新たな側面を抽出したり、従来の研究成果に異議申し立てを行うのが、この一群の多くの研究姿勢である。

本論文では、このような従来の「ジェンダー地理学」において明示的な対象として扱われることの少なかった、「空間と男性」研究を進め、それによって空間のジェンダー構造の未検討の側面を解明し、「女性」の視点を中心であった「ジェンダー地理学」の再構築をめざしている。

第Ⅰ章では、日本におけるジェンダー研究の研究史を批判的に整理・検討することによって、ジェンダー地理学における男性研究という視点の欠落とその必要性を主張する。すなわち、研究者が「男性」であるという「ポジショナリティ（立場性）」が看過されてきたことを明らかにし、男性地理学者がジェンダーを、男性という「自己」の問題として了解していくという方向性が必要であることを導き出している。さらに、女性の視点の偏重やセクシュアリティに対する理解の不十分さといった、ジェンダー概念の認識にある種の誤解を生じさせている一因には、欧米の研究成果を翻訳する形で問題提起されがちであったことがかかわると指摘している。

第Ⅱ章では、ジェンダー概念の認識の誤りが、現実の空間の構築において引き起こした問題の具体例を分析している。ジェンダーの視点を導入して設計されたといわれる岐阜県営住宅「ハイタウン北方」を事例とし、総合プロデューサーの男性建築家、居住者、男性建築家に選定された7名の女性設計者、施工主の岐阜県という4つのアクターを分析対象としている。その結果、この住宅地の空間は、ジェンダーの視点を踏まえたものというより、女性設計者に設計を依頼したにとどまり、むしろジェンダーの視点が問題としてきた男性中心的な発想で生産されたものであることを析出している。ジェンダー概念に伴うポジショナリティの意味が、男性建築家をはじめとして空間設計者たちに十分に把握されていないことが、現実の空間において表出していることを示している。

第Ⅲ章では、現実の空間における男性という存在の諸相の事例として、「現代の中年シングル男性が疎外される場所」を取りあげている。中年シングル男性にとっての「地方」「住まい」「職場」「都市」という4つの場所の意味を分析し、このような場所や空間の疎外性の問題が、中年シングル男性にとってはもとより、男性全体にとっても相通じるものであることを指摘し、従来のジェンダー地理学の知見に新たな視点を加えている。

第Ⅳ章では、1999年における防衛政務次官西村真悟衆議院議員の発言をとりあげ、「異性愛男性」をめぐる空間のポリティクスを検討したものである。論者は、西村発言の基礎にはセクシュアリティを私的な領域のものとみなす空間構成の認識があると指摘した上で、現実の社会においては、セクシュアリティが公的な場所でも一定の役割を果たしていることを析出している。すなわち、公的な空間は性に関連しない「無性」な空間として、また、公的な空間において性的な表現は「不適切なもの」として品性の次元で認識されている状況を詳細に検討することによって、従来なされてきたセクシュアリティをめぐる空間構成についての認識や議論に対し、新たな視点から批判を加えている。

第Ⅴ章では、「男性」という性別カテゴリー自体が、日本の日常空間においていかなる意味をもつかを検討したものである。「外見の性」という概念を導入し、公共空間における男性という性別が、「外見の性」を意味するものであることを導出し、公共空間の性格の一面を新たに指摘する。さらに、「女性専用空間」の意味を考える上でも、この視点が有意であるとする。

第Ⅵ章では、男性の「身体」の次元に注目し、たばこ広告にみられる男性の身体と空間を分析する。その結果、「自然への挑戦」「非言語的な『語り』」「女性の視線の同伴」「煙の吐露」「同性身体との距離の保持」という5点の特徴があることを析出している。これにより、男性身体と空間の関わり方のみならず、日常的な空間が男性の一定の身体所作によって構築されていることを示唆している。

最後の第Ⅶ章では、「男性」という性別カテゴリーの認識をふまえたジェンダー地理学の理論的な側面について、研究方向の展望を試みている。今日のジェンダー地理学では、性別カテゴリーを社会的な構築物として捉える「クィア理論」が主流となっているが、この理論の問題点を指摘し、「ジェンダー地理学の再構築」という課題の達成への道程を展望している。

本論文は、以上のように「空間と男性研究の可能性」を追究することにより、ジェンダー地理学の再構築をめざすものである。第Ⅱ～第Ⅵ章の5つの事例研究により、空間のジェンダー構造についての新たな指摘を行ない、また、その視角を確立すると共に、今後の方向性についての展望を加えた点でも、設定された研究目的にふさわしい研究成果とみなすことができる。各章を構成する計7つの論文のうち、最終章の展望を除く6章がすべて地理学の最も主要な雑誌の論説として採択、公刊されている。そのうち1編は日本地理学会賞を授与され、別の1編は最も主要な英語雑誌に採択され、間もなく公刊されるものである。

この状況は、本論文が地理学界において高く評価されていることの一証であり、新しい方向としても今後の発展が期待される所以でもある。本論文はこのような大きな意義を有するものであるが、同時に新しい領域へと踏み込んでいる分、論述の展開に多少の「荒さ」がみられることも否めない。このようなテーマを開拓しつつある論者が、今後、さらなる事例分析の蓄積と方法論的整備・展開を進めることが望まれるところではある。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2005年2月16日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。